

河内小だより

平成20年7月8日 No.14

読解力について

「読解力」を伸ばすヒントは日常生活の中にたくさんあります。まずは豊かな読書環境を整えていくにはどのようなことを心がければよいのでしょうか。

- ①読書に適した環境づくり…目につく所に本を置くなどして、読書に適した環境をつくりましょう。本を読みなさいと強制するだけでは、子どもは本好きにはなりません。おうちの方も読書の習慣をつけることが大切です。
- ②親子で本をチョイス…年齢にもよるとは思いますが、一緒に書店や図書館へ行って、子どもが読みたい本とおうちの方が与えたい本の接点を探してみてもはどうでしょうか。
- ③読んだ本でコミュニケーション…年齢や本によっては読み聞かせをしたり、同じ本を読んだ後親子で楽しく話をしたりすることです。このとき、一つの意見を押しついたり、子どもの意見を否定したりしないことが大切です。

書いてある内容や問われていることを正確に読み取ったり、自分の考えを説得力を持って相手に伝えたりするためには、言葉の力をつけること、言語技術力の向上が大切です。

- ①「主語と述語」を盛り込んだ会話を心がける。
つい単語だけで会話してしまうことがあります。あいまいな表現ばかりしていると、思考もあいまいになりがちです。「牛乳」ではなく「お母さん、わたしは牛乳が飲みたい」と、普段の生活から言葉を省力せずに文の形で会話するようにしたいものです。
- ②自分の意見には「理由」を言わせるようにします。
自分の意見を相手に納得させるためには、その意見の「理由」を伝えることが必要です。「どうしてそう思ったの」など、例えば、テレビ番組を見ていて「おもしろかった」と言えば「どんなところがおもしろかった」と尋ねてみましょう。初めのうちは無理強いをせずにおうちの方の意見とその理由を話すなどして、言葉にするヒントを与えることも大切です。
- ③根拠と意見を文の形で話させる。
単語や文節だけでなく、「太陽は東から昇るから、あっちが東だ」のように、しっかりと文の形で表すことで論理的表現力がついてきます。ここで言う「根拠」は、「水は零度で凍る」など一般的に正しいと考えられている「裏付けのある知識」であることを意識させることが必要です。

【まとめ】

- 情報を読み取る最初のステップは「気づく」ことです。低学年では、比べることで違いに気づく観点を伝えましょう。高学年では、気づきに対しての理由や因果関係を自分なりに考えることができるようになります。そしてそれを確かめるためのヒントを与えてみましょう。例えば、調べ方を教えたり、似たような体験を思い出させる糸口にしたりすることです。
- 解釈するときのベースは、自分の知識や体験です。低学年では、自分の過去の経験から似ていること探させます。気づいたことに対して、自分の経験や知識を当てはめて考えることをくり返すことが大切です。高学年では、自分の過去の体験だけでは補えないことも出てくるので、身近なところから似たような事例が使えないかよく考えることです。
- 自分はその物事についてどう考えるのか、賛成なのか反対なのか、分かったこと分からなかったことは何かの結論を出します。低学年では、うまく言えないかもしれませんが、考えて分かったことを言葉にさせます。高学年では、分からなかったことやまだ疑問として残っていることも言葉にさせます。次の物事に向かうときの「自分にとって大切」な情報の取り出しにつながっていきます。